

武 智 秀 夫 (著)

手足の不自由な人はどう 歩んできたか

——人権思想の変遷と義肢装具の進歩——

千野直一 (慶応義塾大学医学部リハビリ科)

リハビリテーション医学領域において、「義肢装具学」が一つの大きな分野を占めていることはいうまでもない。しかしながら、これは医学全般の進歩のなかでもっとも遅れて発展してきた分野であり、学問の一分野としてなりたつようになったのは1950年以降であるといっても過言ではあるまい。

このたび武智秀夫博士により「手足の不自由な人はどう歩んできたか」と題して、四肢体幹に障害をもつ患者に対する義肢装具学の歴史の変遷の解説書が出版された。先生はわが国の義肢装具に関する最高権威者の一人として学会、研修会などで講演され、義肢装具の進歩は他の医療分野と異なり、その根底には身体不自由者が社会のなかでどのように

受けいれられてきたか、ということを見無視しては理解できない、とつねづね強調されてこられた。本書はまさに先生の義肢装具に関する日頃のお考えを総論的にまとめたものといえよう。

すなわち、本書はギリシャ・ローマの時代から、中世ルネッサンス、戦争と産業革命、さらには第一次、第二次世界大戦を経て、リハビリテーション医学が確立されるまでのあいだに、四肢切断者が社会的にどのようにみられ、また、どのような義肢装具が作られたかを、明解な図をとり入れてわかりやすく説明されている。また、義肢装具の変遷とあわせて、世界・日本の歴史、哲学、宗教と著者の博学が本書のすみずみにみちあふれ、筆者などはむしろ後者の

方から教えられるものの方が多いぐらいであり、義肢装具の歴史が無味乾燥におわらずに読者をひきつける内容の本となったといえる。事実、本書の副題として「人権思想の変遷と義肢装具の進歩」とうたっていることからして、著者はこの本をとうして身体障害者そのものの社会的変遷を述べることを意図されたにちがいない。

くりかえすようだが、本書は義肢装具の解説書というだけでなく、肢体不自由者が、「不具」「廃人」という目でみられた時代から、全人間性の復権を得つつある現在に至るまでの変遷を知るために、実に有益な本であり、国際障害者年に書かれたということはまさに期を得たものといえよう。

一方、義肢装具の専門的な情報を得ようとする読者には内容的に簡略すぎるが、巻末に専門書の紹介もあり、リハビリテーション医療関係者にはぜひ一読するようすすめたい書である。

(A 5 / 頁188 / 1981 / ¥1,450 /
医歯薬出版 刊)

● ニュース

ねたきり老人は32万4000人

＜厚生行政基礎調査＞

厚生省はこのほど、世帯の実態を明らかにし厚生行政の企画・運営に役立てることを目的とした厚生行政基礎調査の56年概況を発表したが、いわゆる「ねたきり老人」は前回調査時(53年)より2万5000人増の32万4000人いることが明らかになった。

この調査は、全国から抽出された約9万3000世帯、約30万3000人を調査客体とし、昨年6月4日に調査を行ったもの。

56年6月4日現在のわが国の世帯総数は3612万1000世帯で、前年に比べて78万3000世帯(2.2%)の増加となっている一方、平均世帯人員は3.24で、「1人世帯」や「2人世帯」の小人数世帯の伸びが大きく、世帯規模の

縮小傾向が目立っている。

また、高齢者世帯(男65歳以上、女60歳以上の者のみで構成するか、またはこれらに18歳未満の者が加わった世帯)は総世帯数の7.0を占める253万7000世帯で、前年より11万3000世帯、4.7%増えている。さらに、65歳以上の者がいる世帯は874万5000世帯で、ほぼ4世帯に1世帯の割合で65歳以上の高齢者がいる。

6カ月以上のねたきり者は41万4000人で、このうち、65歳以上いわゆる「ねたきり老人」は32万4000人(男14万5000人、女17万9000人)、前回調査時(53年)より2万4000人増えている。32万4000人の「ねたきり老人」のうち、入院している者は7万2000人、在宅の者は25万2000人の在宅者の方が圧倒的に多くなっている。

(「日本医事新報」3010)